

## 特別支援学級のための音楽鑑賞教材研究Ⅳ

～ピアノと朗読による導入～

宮下 茂（長崎大学教育学部）

### Ⅰはじめに

筆者は、平成 19 年度より特別支援学校の音楽授業に関わりを持ち、日頃の音楽指導活動や演奏活動を授業に役立てることを考えるようになった。(註 1)その後、特別支援学校及び盲学校に於いて鑑賞授業を行うようになり、授業内容を基に鑑賞教材に結び付ける研究を続けてきた。(註 2、3)そして、自然音と歌による音楽鑑賞プログラムを考え、その試行授業を行ってきた。(註 4)

その鑑賞プログラムの中の 1 曲として、ドイツ歌曲の「詩人のトム」(カール・レーヴェ作曲)を選択した。

この歌曲は、詩人と妖精の恋物語を歌うバラードであり、作曲者はピアノパートの音楽描写により、詩の情景を効果的に表している。鑑賞授業の中では、そのピアノの音に対応する自然音を、予め効果音として聞きながら物語を紹介し、その後全曲演奏を行い、ピアノの音から情景を想像する手順であった。

「詩人のトム」の鑑賞では、上記の手順とは別に、ピアノの音を直接効果音として聞きながら、物語を朗読し、想像を促す鑑賞プログラムも考えられた。この朗読とピアノによる導入を加えた鑑賞プログラムは、特別支援学校での音楽授業に限らず、演奏会でも楽しんで鑑賞できる内容であった。筆者は鑑賞への導入とした同曲のこの手順を、平成 7 年の独唱会のプログラムに取り入れ、以後、機会あるごとに演奏の試みを繰り返してきた。

### Ⅱ朗読とピアノによる「詩人のトム」への導入

平成 7 年の独唱会から取り組み始めた、朗読とピアノによる「詩人のトム」の鑑賞への導入であるが、当初は内容の紹介をピアノ伴奏と共に説明しただけの単純なものであった。

その後、試みを重ねる毎に言葉を取捨選択し、戯曲風の台詞まわしを取り入れるなど、工夫を加えてきた。そして、大人から児童まで、物語と情景の理解と想像が可能になる内容を目指した。

今回、平成 22 年 10 月 14 日に島原第一小学校の 4 年生の授業の中で、この朗読とピアノによる「詩人のトム」の鑑賞を行った。

その授業で行った内容を、【譜例】として掲載するので参照されたい。

鑑賞中の児童の様子から、朗読とピアノによる導入に興味を抱いていて聞いて

いると感じることができた。

授業後に児童が書いた感想にも、「ドイツ語の歌を歌ってもらって本当の歌がわかりました。先生は歌いながら物語をそうぞうして歌っているように見えまして。」「ドイツ語の曲は聞いていて、イッヒピン～と言われているように聞こえました。これはたぶん I'm (私は) という意味だったかなあとわかって、少しうれしかったです。」「ドイツ語の歌はとてもすごかったです。歌はなんとなくわかったきがしました。なぜなら、歌う前に、話の中みをだいたい聞いてもらって、歌の中に『パッファ』というのが出てきたきがしたからです。中みがわかってたのしかったです。」「心に残りました。その中でも、詩人とようせいの女王様が出てくる曲が、その様子を想ぞうできました。」など朗読を手掛かりとして、情景の想像に止まらず、ドイツ歌曲やドイツ語への興味も表れたことが読み取れた。

筆者は、今回の研究内容を基に、語りと自然音、歌との組み合わせの鑑賞プログラムのほか、朗読とピアノによる鑑賞プログラムも考え、それらを組み合わせた鑑賞教材研究を深めていく所存である。

## 註

- (註 1) 論文題目「特別支援学級のための音楽鑑賞教材研究Ⅰ～音楽授業観察による指導目標の考察～」宮下茂、長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、2008.3 第7号、91-96、2008年3月参照。
- (註 2) 論文題目「特別支援学級のための音楽鑑賞教材研究Ⅱ～実演奏による鑑賞授業(1)～」宮下茂、長崎大学教育学部教科教育学研究報告書、第49号、71-82、2009年3月参照。
- (註 3) 論文題目「特別支援学級のための音楽鑑賞教材研究Ⅱ～実演奏による鑑賞授業(2)～」宮下茂、長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、2009.3 第8号、159-166、2009年3月参照。
- (註 4) 論文題目「特別支援学級のための音楽鑑賞教材研究Ⅲ～実演奏による鑑賞授業～」宮下茂、長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、2010.3 第9号、79-88、2010年3月参照。

## 詩人のトム

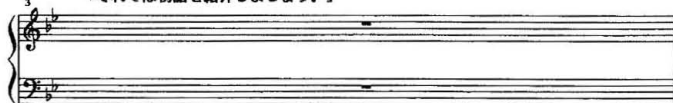
C.レーヴェ

(語り) 「詩人と妖精の恋物語を歌った、メルヘンチックなバラード『詩人のトム』。  
この曲はこんな前奏で始まります。」

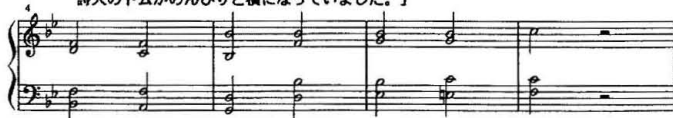
Allegretto suave



(語り) 「皆さんお気付きでしょうか。これは小川の流れる様子を表しています。  
レーヴェは自然描写を得意とし、この曲では小川のせせらぎに始まり、  
ある時は馬の蹄の音、ある時は鳥のさえずりとなり、物語の細部まで、  
まるで目で見るかのように、音で表しています。」  
「それでは物語を紹介しましょう。」



(語り) 「舞台はハントリー城のそば、キーゼル川の辺。  
詩人のトムがのんびりと横になっていました。」



(語り) 「そこへ美しいブロンドの女性が、  
白馬に乗ってやってきます。」



(語り)「馬の手綱についた銀の鈴が、*guc.*-----  
明るい音を發でています。」

*(guc.)*-----

*(guc.)*-----

(語り)「トムは帽子を取って走り、挨拶をしてこう言います。」

(語り)「あなたは天国の女王様、この世の人ではありません。」 (語り)「するとその女性は、  
こう言います。」

(語り) 「私は天国の女王ではありません。  
私は妖精の女王です。」

(語り) 「そして魔法の呪文のように、  
こう続けます。」

Musical score for measures 27-29. The score is in treble and bass clefs. Measure 27 starts with a piano (*dim.*) dynamic. The melody in the treble clef features a series of eighth notes and quarter notes, while the bass clef provides a steady accompaniment of eighth notes.

Musical score for measures 30-32. The score is in treble and bass clefs. Measure 30 starts with a piano (*p*) dynamic. The treble clef has a melodic line with eighth notes, and the bass clef has a rhythmic accompaniment of eighth notes.

(語り) 「竖琴を取りなさい。得意の歌を

Musical score for measures 31-32. The score is in treble and bass clefs. Measure 31 features a melodic line in the treble clef with eighth notes, and the bass clef has a rhythmic accompaniment of eighth notes.

聞かせなさい。」 「でも、もし私に口づけをしたならば、七年間は私の虜となります。」

Musical score for measures 33-34. The score is in treble and bass clefs. Measure 33 features a melodic line in the treble clef with eighth notes, and the bass clef has a rhythmic accompaniment of eighth notes.

Musical score for measures 35-36. The score is in treble and bass clefs. Measure 35 features a melodic line in the treble clef with eighth notes, and the bass clef has a rhythmic accompaniment of eighth notes.

(語り) 「本当ですか女王様、七年間…恐ろしいことなどありません。」

37

The musical score consists of two staves. The upper staff is in treble clef and the lower staff is in bass clef. The key signature has one sharp (F#) and the time signature is 4/4. Measure 37 starts with a treble clef and a common time signature. The melody in the right hand begins with a quarter note G4, followed by quarter notes A4, B4, and C5. The left hand accompaniment consists of chords: G2-B2-D3, A2-C3-E3, B2-D3-F#3, and G2-B2-D3. The melody continues with quarter notes D5, E5, F#5, and G5. The left hand accompaniment continues with chords: A2-C3-E3, B2-D3-F#3, G2-B2-D3, and A2-C3-E3. The melody concludes with a half note G5, which has a fermata above it. The left hand accompaniment ends with a chord of G2-B2-D3.

(語り) 「こうして二人は口づけを交わし、それを祝福するかのように遠くで鳥が囁きます。  
そうして二人は明るい太陽の日差しの下、うれしそうに駆けて行きました。」

(→全曲演奏へ)